

縄文人と色

はじめに

縄文時代（約 1 万年前～2000 年前）の定住生活のなか、さまざまな場面でマツリが行われました。マツリの場などで利用するため、特殊な道具や装身具などが多く作られました。これらは彩色されたり、美しい色の石が使われたりと、「色」を意識して作られたようです。

今回の展示では、富山市内の縄文遺跡からの出土品（ヒスイ玉、赤色顔料（ベンガラ・赤漆）が彩色された土器・土製品など）や写真パネルを通して、縄文人の生活と色のかかわりを探ります。

緑色(ヒスイ)と縄文人



硬玉製大珠出土遺跡の分布
 (『ものづくりの考古学』東京美術 2001 年に加筆)

縄文時代、ヒスイは陸上ルートや海上ルートによって、山陰地方を除くほぼ日本列島全域にもたらされました。ヒスイの原産地は日本列島で現在 11 ヶ所が知られていますが、実際に縄文時代の玉製品として使われた石材のほとんどは、新潟県と富山県の県境付近（小滝川・青海川流域）で産出されたものでした。このようなヒスイ製品の分布から、緑色に魅せられた縄文人の心を読み解くことができます。

ヒスイは透明度があり、鮮やかな緑色をしていることから、主に首飾りなどの装飾品として使われていました。緑色は、草木の新芽のような生命の躍動や、死からの再生・復活を意味していると考えられます。緑色に輝くヒスイは、装飾品として使われただけでなく、魔除けなど呪術的な意味などを示すものとしても使われました。

赤色(ベンガラ・赤漆)と縄文人

ベンガラ ベンガラは、鉄分が多い岩石や土を精製し、焼成することで生成できるため、縄文時代の赤色顔料として多く利用されていました。赤色は、血の色や太陽の色などを連想でき、生命を象徴しています。

赤彩土器は特殊な形が多いことから日用品ではなく、主にマツ



写真1 生命の象徴としての赤色
 一赤漆塗りのクシー（小矢部市桜町遺跡）
 『桜町遺跡 調査概報』学生社 2001 年

りなどの場で使用されたと思われます。赤彩された土偶も多くあります。赤色は神聖な、さらには呪術的なものとして縄文人の生活に欠かせない色でした。

赤漆 富山市浜黒崎野田・平榎遺跡から出土した土器には赤漆を塗ったものがあります。漆工技術は、縄文時代にはすでに存在していました。漆は、堅櫛や鉢などの木製品や土器に塗られており、日常生活のさまざまなものに使われていま



写真3 赤漆塗り鉢(小矢部市桜町遺跡)
『桜町遺跡 調査概報』学生社 2001年

また、漆液は夏場の高温・多湿時に採取され、採取と同時に固まり始めるため、長時間の保存や運搬は困難です。そのため漆は、原料ではなく製品として流通していたのかも知れません。

漆製品の富山県最古の出土例は、射水市南太閤山Ⅰ遺跡の漆塗りヒョウタンです。また、小矢部市桜町遺跡では、赤漆と黒漆を塗り分けた鉢が出土しています。これらは、ベンガラや木炭の粉・煤を漆に混ぜて作られました。

さらに、朝日町境A遺跡からも赤漆を溜めた深鉢が出土しています。



写真2 縄文人の色作り
—ベンガラ付着の磨石、石皿、パレット—
(新潟県新発田市館ノ内遺跡)
『ものづくりの考古学』東京美術 2001年

北代の縄文人と緑色・赤色

緑色 ヒスイの原石や未成品が見つかっており、北代遺跡の縄文人もやはりヒスイの緑色に魅せられ、玉作りを行っていたことがわかります。

赤色 北代遺跡ではベンガラや朱といった赤色顔料が塗られた赤彩土器だけでなく、朱が付着した磨石も出土しています。この磨石は、朱原料を磨り潰すのに使用されたと考えられます。磨り潰した朱を用いて土器などに彩色を施し、マツリなどの場で使用したのでしょう。

おわりに

縄文時代、緑色や赤色は特別な色でした。ヒスイの透き通った緑色には魔除けのほか、生命の躍動や再生・復活などの意味が込められ、マツリなどの場で使用する土器や土偶には、生命を象徴する赤色を彩色することにより、神聖な、さらには呪術的な意味が込められました。これらの色はそれぞれ意味を持ち、縄文人の精神文化に大きく関わっていたのです。

展示品一覧(写真パネルを除く)

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1. 浜黒崎野田・平榎遺跡(縄文土器・土偶・耳栓) | 2. 八町Ⅱ遺跡(垂飾) |
| 3. 百塚遺跡(土偶) | 4. 北代遺跡(縄文土器・玉) |
| 5. 北押川B遺跡(垂飾) | 6. 平岡遺跡(玉) |
| 7. 二本榎遺跡(玉) | 8. 花切西遺跡(縄文土器) |
| 9. 富山市大沢野直坂地内(ベンガラ原料) | 10. 新潟県佐渡市(緑色凝灰岩原石) |